



## vol.5 距離ゼロ (Re:ルネサンス)

---

えーっと(^^ゞ

「じゃあ一年中ダンゴをやれってのか？」

って質問をいただきました。

僕のコラム「ルネサンス」を受けて、ですね。

僕が釣りを覚えた頃は、真冬でも何とかなる池が多かったですが、さすがに現代でそんな練習方法を押し付けるワケにはいかないと思いますね。

なので、

「ダンゴは厳しいと感じたらセットに移行する」

って答えたいところですが、コラムの釣り場では、そう判断された方々がクワセを付けて悶絶し、その横でダンゴで釣ってしまう人も居た、という話ですからね。エサ合わせの限界点には、個人差がありますので難しいところです。こういう話をすると、どうしても上からの立ち位置になってしまうのでイヤなんですけど、遠慮してたら始まらないので書きますが。

僕の中で基本となる分岐点は、やはり季節ですね。水温です。何度？って言われると、寄った魚影密度によって、その群れの競争心も違うので困りますが、

「フィッシングプレッシャーではなく、水温低下による摂餌活動の鈍化」

を感じ取れた時には、その池でのダンゴの季節は終わったなと判断します。変温動物ですから。ただし、新ベラに触発されて旧ベラが再度活発になるケースもありますよね。要は、所謂「食い渋り」と呼ばれる状態を、「人為的要因」と「生理的要因」とに分けて考えるということでしょうか。ちなみに「新ベラによる触発」は、どっちの要因と呼ぶべきでしょうね？なかなか難しいですが、クスリを撒く、ペレットを沈める、などと同じ効果があるのだとすれば、「人為的要因」なのでしょう。

放っておけばバラケてハリから落ちるエサを、慌てて食べる必要は、本来ヘラにはありません。その一線を突破する要因は、条件反射もあると思いますが、「活性（食欲）」と「競争心」だと思います。仲間の誰かがダンゴの芯に飛びつけない活性であれば、競争心も薄くなります。みんなで仲良くバラけた粒子を吸うことになるワケです。ただし、ダンゴの争奪戦は起こらずとも、バラけた粒子への競争心が残ることは有り得ます。従って、論理的には、時間



20~30枚超というような、一見ダンゴでの釣果のような数釣りに、セットでも持ち込める可能性は残るわけです。数だけ聞くと、上バリも半分くらい食っていそうなイメージですが、イレギュラーとして数枚混じるだけで、見事に下バリを喰えて上がってくるという釣りも有り得ます。事実、経験もあります。

問題なのは、この状況を「食い渋り」と呼べるのか？ということです。呼べませんよね。しかし、ダンゴではアタリを出せないでセットへ移行したのだとしたら、それ以前の状況は、やはり「食い渋り」と片付けられたことでしょう。それでも、「渋る」という言葉のイメージからは「警戒心」が連想されるので、僕は違和感を拭えません。

「競争心」は、個体の活性ではなく、群れの個体数で決まります。

「すんげーハラ減ってるんだけど、ひとりじゃ怖くて食えないよ」

的なシーンは、野釣りのビデオで何度か見ました。ある程度の数になるまで、誰一人アクションを起こしません。これは人間社会と同じですね。異端児が現れ、最初の突破口を開くまでは日和見です。革命が成功するか失敗するかは分かりませんが、事態の打開や祭には、ヘラの世界でも人の世界でも「お馬鹿さん」が必要なのです。それまでのあいだ、ウキで感じられるのは、何となくエサ溶けが早まったかな？程度のもので、もちろん、それもサワリのひとつではありますが、加速度的に締まっていくエサを使っていたら、見逃すサインではありますね。

ここで気になるのは、管理釣り場で良く言われるところの「寄りはじめはカンタン」というヤツですが、その後のMAXの寄りに耐えられないセッティングやエサだからこそ釣れるワケで、寄りはじめのヘラが素直だと判断するのは早計です。目的とするタナの上層に、邪魔をすヘラは少ないのかもしれませんが、「競争心」も備えるだけの、それなりの数のヘラがはじめから居るのだ、と捉えるべきでしょう。ここまで聞いても、素直で活性の高いヘラが先に寄ったのでは？という見方もあると思います。「競争心」が個体数に比例するなら、数の少ない内は「警戒心」が大きい筈で、「とびきり素直でがっついたへら」が先に寄らないと辻褃が合わねえ！ってのは説得力ありますよ。イメージ的には、なんとなくそうかも？って感じられるんですが、活性の高いヘラが常にヨタベラより先にエサに飛びついてくれるなら、この釣りはもっと簡単だとも思うんですね。寄りがMAXになった時こそ釣りが簡単になっても良い。たしかにそういうケースもありますが、実際はヨタベラに邪魔されてスレばか



りだと感じるケースも多いでしょう。大量のヘラを捌くだけの技量が、釣り人側にあるのかってのも大きいですが。なので、そこはご自由にどうぞ、でスルーします。

何もメジャートーナメントのような普段と違うムードではなくとも、ヘラにとって「警戒心」は常にあります。もしゼロなら吐き出しませんから、カラツンありませんね。足元のヘラが落としたエサを吐き出さないのは、学習によってハリが付いていないことを知っているからです。ゲキカラの筈の餌も、美味しそうに食べてくれます。ここで実験で、ハリ付きのエサで数枚釣ってみれば、沖の投餌点と同じように吐き出すようになりますが、しばらく休ませれば、またハリのないエサだと再認識して吐かないようになります。

「警戒心」を「活性」と「競争心」がどの程度上回るかで、バラける物体へのヘラの立ち位置が決まることになります。即ちこれは、セットで言われるところの「距離」でもあり、「距離ゼロがダンゴ地合」なのは言うまでもありません。弱いサワリしか無くなったと感じれば、ゼロから離れていくヘラを引き留めるために、エサをシメていきます。究極はノーバラケですね。固形です。バラケの拡散範囲を狭めることで、ヘラがダンゴの芯から遠巻きになるのを防ぐ狙いです。セットしかやったことがありませんっていうアングラーを結構見かけるんで驚いちゃいますが、実はセットのバラケもダンゴも基本的な考え方は同じですね。食わせたい芯がバラケの内部にあるのか外部にあるのかの違いだけです。僕としては、学ぶ順序が逆のように感じるのが正直なところですが、方法論を持ち合わせないダンゴマンよりも、セッターの方がよっぽど水中を考えていると思っています。

クワセに反応させるための粒子の活用論はダンゴには（ほぼ）無い領域であり、一筋縄で行かないのは承知ですが、ターゲットではないヘラを躲するための粒子使いは双方にありますので、たったいまセッターを褒めたからといって、ダンゴよりバラケの方が難しいという気もないのです。あくまでも、ダンゴとセットは表裏一体です。捉え方は人それぞれですけど。話を戻します。

シメる方法は、粉を足して硬くするでも、練ったり粘る素材の比率を増やしたりして粘らせるでも、どちらでも良いです。理論上は。

実際は、ケースバイケースですよ。でもこれでは曖昧なんで、あえて書くと、おそらく硬くしたほうが良いケースが、一年を通せば多いのではないかと思います。なぜなら、両者が



水中に提供する粒子量の総量に差がなかったとしても、アワセやエサ切り時の舞い上がりにおいて、粒子の拡散範囲に差が出るからです。せっかく距離を縮めたいがためのシメなのに、ヘラをボカす恐れのある諸刃の剣ですが、距離を縮めることに夢中になるあまり、寄せが疎かになるのが、シメ行為の一番のネックです。そしてこれが、活性の低い冬季だけでなく、暖季でも「競争心」を煽るだけの個体数を確保出来ない状況において、ダンゴが効かない最大の理由です。

「今日はダンゴじゃ、食わせようと思えば寄せられないね」

よく聞きます。一言で言うてしまうところなんですが、なんでそうなのかってところがイマイチ分かっていなかった方は、これで劇的スッキリ？ガッテンガッテンガッテン...はダンゴエサですね。

「セットは寄せが効くからな！」

これも、セット専用開発された粉剤の成分による集魚効果ではなくて、寄りをキープするために必要な粒子量ありきの釣りだからです。バラケの芯から遠ざかった位置でスタンバイするヘラに、ある意味「ダンゴの擬似芯」だけ届けることが可能な釣りだからに他なりません。短段差でもメーター段差でも、必要なバラケの煙幕の大きさにアジャスト出来るのがセットの強みです。煙幕の内側だろうが外側だろうが、クワセの配置位置は、釣り人の戦略によって自由自在です。ボソだから寄るのは間違いではないですが、そういう理解だと、軟ネバのバラケを説明出来ません。

真冬にダンゴが効いた時代の種明かしもカンタンです。低水温に震え、ジッとしていたい気分なのに、競争せざるを得ないだけの数、ライバルが居たのです。つまり、「競争心」が「警戒心」だけでなく「活性」をも上回った結果です。え？井戸水で水温が高かった可能性？そういうのもあると思いますヨ^^

その時代は、夏は当然共エサでした。ダンゴでは寄り過ぎてウキが立たず、どうやって集魚せず釣るかに腐心した時代でした。トロコンが代表例ですね。でもこのエサにも一癖も二癖もあって、単に寄せないためのエサと括るのは避けたいところです。

イマは真逆の、真夏のセット。「警戒心」は人の入り方で変わります。「活性」は酸欠がな



ければMAXです。残る「競争心」は放されているサイズを見れば見当がつきます。大型ばかりを大量放流するのはかなり難しいですが、入釣者の数で総量を割って考える必要があるでしょう。ダンゴなのか、セット的なダンゴか、それとも上下どちらでも食って良いセットか、いや、完全なセットか。迷いは尽きませんが、統計学的に、セットを選んだトーナメントが多いというのが現実です。一日の中でダンゴへの反応が強まる時間帯も当然あるシーズンで打つセットには、臨機応変という言葉が他のどの釣り方よりも相応しい気がします。つまり、難しいんです。だからこそ、この釣りから覚えようとするのは、遠回りな気がする僕なのです。

ダンゴのエサ合わせにおいての、ヘラを距離ゼロに引きつけておく作業と寄せる作業のバランスも難しいものです。引き出しの有無で釣果に差がつくのは言うまでもなく、ダンゴを楽しめるシーズンの長さも技術に比例するでしょう。ベテランほど、寒くなってもダンゴで遊べるということです。それが「勝てる釣果」とはほど遠くても、です。なので、ダンゴからセットへの移行は、やっぱり人それぞれでって結論になっちゃいますよね。勉強するならとりあえず、暖かい時季は何があってもダンゴで通してみても、寒くなって来て自分のダンゴではアタリを出せないってなったら、いよいよセットってのが良いんじゃないでしょうか。こんな回答じゃ不満かしらf^\_^;

(Facebookより転載)

2014.9.17 江成 公隆